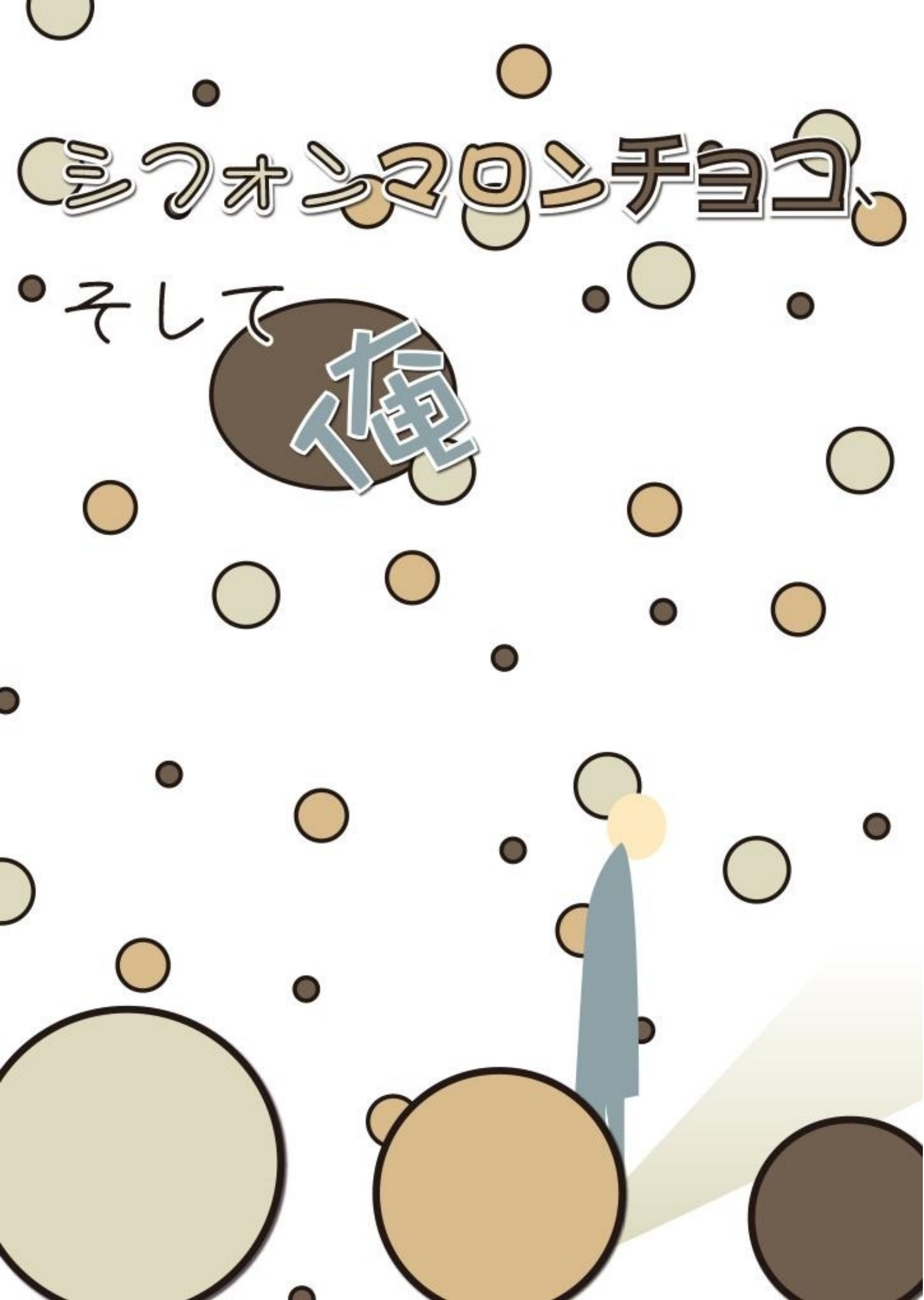


三つオンマロンチヨコ

そして

梅



シフォンマロンチョコ、そして俺

今日、俺は43年勤めた会社を定年退職した。陽が高いうちに家に帰るなど、何年振りだろう。永い単身赴任から解放され、足取りも軽い。部下から贈られた花束は気恥ずかしいが、妻へのプレゼントも用意した。二人で行く旅行チケットだ。美佐子の喜ぶ顔が早く見たくて、勢いよくドアを開けた。

そこに、美佐子が倒れていた。

救急車で運んだが、二度と目を開けることはなかった。

葬儀をどのようにしたのか、よく覚えていない。子供のいない俺たちだから、親戚や友人に助けられたのだろう。

あれから時間が止まってしまった。猫が、ずっと騒がしい。三匹いる。また増えていたのか。

「はらへってるのか」

そうつぶやいてみたが、猫は、俺の方へは寄ってこず、鳴き叫んでいる。餌を置いている場所が分からない。しかたなく、着続けたジャージのまま、コンビニへ行き、キャットフードを買って来た。ボールにあけてやると、猫は狂ったように食べた。しかし、一匹が、突然、俺の足に爪を立てかみついた。俺は、それをおもいきり蹴とばした。

「何するんですか！あなた」

目の前に、ものすごい形相をした美佐子が、立っていた。

「み・美佐子！おまえ」

「かわいそうなシフォンちゃん、怪我はないかしら」

「俺は、お前に礼が言いたくて。ずっと一人でさびしかっただろうと。それで、温泉へ行こうとチケットを……」

「何言ってるんですか！私は死んだんです。急いでいるんです。時間がないの」

「だったら近くの温泉でも……」

「勉強さん、私は死んだの。幽霊なんです。幽霊が、温泉行ってどうするんですか？」

絶句した俺は、ゆっくりと美佐子の足を見た。浮かんでる。透けてるようだし。三匹の猫が、ゆるゆる美佐子に甘えた声を向けている。

美佐子は、猫にやさしく微笑んだ後、俺をにらんで言った。声は、はっきり聞こえる。

「ゆ、ユーレイって、温泉は……」

「そんなこと、どうでもいいんです。このねこたちが、あまりに愛しくて。なんとかわずかな時間だけ、この世にもどしてもらったんです。まずシフォンちゃん」

「どれだ？」

「白と黒のあなたが蹴とばした子ですよ。この子は心臓と腎臓が悪いの。駅前の……」

「お前、ずっと具合が悪かったのか？俺は、これからどうしたらいいのか分からない」

「いいから聞いてください。駅前の病院で、フランスのロイヤルキナンの腎臓スペシャルを……」

「ばかばかしい、高いんだろうが。そうだ。赴任先から送った段ボールの中に……」

「いいから聞いて下さい。かなりお値段はしますけれど、それから、毎月病院で検診……」

「俺も、言葉にできない辛いことがたくさんあったんだ。しかし、歯を食いしばって働いた。これからはおまえと、海外旅行とか……」

「ありがとうございます。お気持ちだけいただきますよ。それより、次はマロンちゃん、この子はお腹をすぐこわすの……」

「どれだ？」

「そのうす茶色の子、ごはんにはビオタルミンを混ぜて……」

「ごはんってえさだろうが。ばかばかしい」

「ごはんです！」

「ビオタルミンってなんだ」

「お腹の薬、錠剤です」

「一粒、口に放り込めばいいんだな」

「冗談おっしゃらないで。細かく砕いて……」

「美佐子、苦しかっただろう。一人で……」

「もう過ぎたこと。それより、子ねこのチョコちゃん、この子はかわいそうな子で……」

「かわいそうなのは、俺だろうが」

「ゴミ袋に入れられて、捨てられてたの。すっかり弱ってね。もうなんて言ったら……」

「お袋の面倒も押しつけてすまなかった。なんとかと考えるはいたんだが……」

「過ぎたことです。それよりしっかり聞いて下さい。チョコちゃんは、子ねこ用のごはんをあげて下さいね。食が細いので、気をつけてあげて。先生に相談して……」

「俺なんぞ、ずっと食ってないぞ。どこだ、その動物病院……」

「あ～もう時間がないわ。合図があったの。それじゃこの子たちのこと……」

「待ってくれ！美佐子！俺と猫、どっちが大事なんだ！ねこか」

「決まってるじゃないですか。この子たちのこと、くれぐれもよろしくお願いしますね。では、さようなら」

美佐子の姿は、溶けるようになってしまった。俺は、大きくため息をついた。そして笑った。声をあげて笑った。そのうちに我慢ができなくなって、腹をよじって笑い転げた。すると、涙が後から後からこぼれてきた。床を叩きながら泣いた。ふと目をあげると、三匹の猫が俺を見つめていた。

そうか、俺はまず、こいつらの面倒をみないといけないのか。そう思うと、体中の強張りがとれた。ひげを剃り、着替えると、生き返った気がした。

閉め切っていた雨戸を開けて、窓も開けた。公園の散り始めた桜が舞い込んできた。台所を探すと、きちんと整理されたキャットフードもあった。えさ、いやごはんか。苦笑しながら、三つの皿に入れてやった。猫たちが、ゆったりと寄って来た。

携帯電話と電話帳を取り出し駅前の動物病院の番号にかける。

「もしもし、三丁目の中村と申します。ロイヤルキナンとビオタルミン……あと検診をお願いしたいのですが……」

予約を終えて、俺は、大きなあくびをした。

少し間をおいて、猫が三匹、そろってあくびをした。